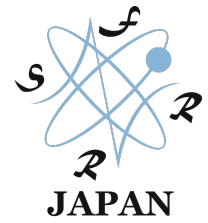


SFRR Japan NEWSLETTER January 1, 2023



Top News

2023年 卯年



年頭のご挨拶

理事長 内藤 裕二

(京都府立医科大学学生体免疫栄養学講座)



新年を迎え、会員みなさまにおかれましては、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。理事長として2期目を務めさせていただくことになりました。

2020年春以来、世界中に拡がった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)はわれわれの研究、臨床、教育に大きな影響を与えることになりました。さらに地球温暖化問題、ウクライナ紛争などの影響も多大です。しかしながら、学会活動も順次再開されており、2022年秋にはSFRR Asiaが韓国ソウルで、SFRR Australasia+Japanがニュージーランドのクライストチャーチで開催され、日本からも少人数ですが貢献することができました。

2023年には23rd SFRR International Biennial MeetingがウルグアイのPunta del Esteで



11月に開催されます。Punta del Esteは大西洋に面した南米有数のビーチ・リゾートのようです。私はすでに参加予定ですので、会員の皆様も奮って参加をお願い申し上げます。

さて、本学会は法人化され、29名の理事、86名の評議員で、400名弱の会員で構成されています。本学会が扱う学問領域(酸化ストレス、レドックス・バイオロジー)は、新たな幅広い領域に向かって発展を遂げつつあります。転写因子Nrf2・活性イオン・フェロトキシスへの関心の高まり、医工連携として低温プラズマの医療応用などが進んでいます。また、副理事長の赤池孝章先生(東北大学)、事務局長の半田 修先生(川崎医科大学)とも相談し、委員会活動を活発させるべく委員の改変も実施しました。産学官連携委員会も新設し(赤池委員長)、学会の英知を濃縮した研究プロジェクトを進めていきたいと考えております。

日本酸化ストレス学会は学会誌としてJ Clin Biochem Nutr, Free Rad Res, Free Radic Biol Med, Redox Biolなど複数の雑誌があります。会員の先生方には学会誌への優先的な投稿をお願いしたく存じます。

末筆となりましたが、本年も会員各位におかれましては、昨年にも増して健康と安全に十分に留意され、ますます御活躍になることを祈念しております。



■ 新企画！ 酸化ストレス川柳 ■ 大募集

学会活動、研究活動、日々一進一退、色々悩みながら、喜びや落胆を繰り返しながらも前進あるのみ、会員の皆様の心のうちを川柳に乗せて、吐露してみませんか？

採用された方には、良いことがあるかも？！何があるかは検討中です♪



例えば、
「何してる？ 聞かれて困る レドックス」
「学会で 一番大事な 懇親会」
「ストレスは 酸化だけで ご勘弁」



学会事務局宛 メールでお寄せください。

sfrj@koto.kpu-m.ac.jp

随時受付、優秀作品はニュースレター上で紹介します。



◇◇◇ 年次学術集会準備報告 ◇◇◇

第76回日本酸化ストレス学会学術集会



会 期: 2023年5月24日(水)~25日(木)

会 場: 神戸国際会議場

(兵庫県神戸市中央区港島中町6-9-1)

会 長: 芦田 均

(神戸大学農学研究所生命機能科学専攻・教授)

第76回日本酸化ストレス学会学術集会では、「臨床系と基礎系研究のさらなる融合を目指して」をテーマとして設定し、医薬系の研究者と農工系の研究者のこれまで以上の連携強化を図り、研究者間の連携を緊密にすることを目指しております。

プログラムとして、特別講演では、東北大学の本橋ほづみ先生と国立精神・神経医療センターの山村隆先生にご講演頂く予定です。また、教育講演では、熊本大学の澤智裕先生と東北大学の阿部高明先生にご登壇頂く予定です。さらに、「農学系研究者と医学系研究者からの発信~連携に向けて~」、「新たな酸化ストレス研究の切り口」、ならびに「産官学連携シンポジウム」の3つのシンポジウムを予定しております。一般講演(口演とポスター)の演題募集期間は、2023年1月10日(火)~2月15日(水)となっております。また、事前参加期間は、2023年2月15日(水)~4月12日(水)です。

大会情報は、HP (<https://plaza.umin.ac.jp/sfrj76>) に随時アップしますので、ご参考になさってください。

皆様方の多数のご参加とご発表をお願い申し上げます。



◇2022年-2023年新体制スタート◇

2022年5月25日開催の代議員総会を持って、役員(理事・監事)・代議員全員が任期満了を迎え、先の選挙で選出された役員・代議員にて、新体制がスタートしました。

理事長 : 内藤裕二(再任)

副理事長: 赤池孝章(再任)

監 事: 大澤俊彦(新任)、木村博人(新任)

幹 事: 庶務 半田 修(再任)、会計 豊國伸哉(新任)

(理事29名、代議員89名)

いずれも任期は、2022年度代議員総会終了後から2024年度代議員総会終了までとなります。詳細は、学会HPを参照ください。

<http://sfrj.umin.jp/elelection/>

役員動向

1. 新 任 (任期:代議員総会終了後から)

・名誉会員: 足立哲夫、安西和紀、寺尾純二、増野匡彦

功労会員: 樋口恒彦、松郷誠一

・理 事: 居原秀、澤智裕、本橋ほづみ、山岡聖典

・代議員: 伊藤心二、片岡隆浩、神崎訓枝、高橋恭子、

松崎秀夫、安井博宣

2. 退 任 (任期:代議員総会終了をもって、任期満了)

・名誉会員: 森昭胤(ご逝去)、功労会員: 変更なし

・理 事: 足立哲夫、安西和紀、寺尾純二、増野匡彦(任期満了)

・代議員: 鈴木敬一郎、寺尾純二、樋口恒彦、増野匡彦、

松郷誠一、芳野恭士(任期満了)

～ 2022年度 各賞受賞者 喜びの声 ～

各選考委員会による厳正な審査を経て、理事会・代議員会の承認の下、下記受賞が決定いたしました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を祈念いたします。



「2022年度 学会賞 を受賞して」

鈴木 秀和

(東海大学医学部医学科内科学系
消化器内科学 教授)



このたびは、栄誉ある日本酸化ストレス学会の学会賞をいただくことができ、たいへん光栄に存じます。内藤裕二理事長をはじめ、選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。また、長期にわたりお世話になってきた先生方とともに研究をしてくれた仲間の先生方に深く感謝申し上げます。

私がフリーラジカルの研究を始めたのは、慶應義塾大学医学部消化器内科の大学院生として、恩師、土屋雅春教授の指導のもと、当時、消化器内科の助手であった末松誠先生(慶應義塾大学医化学教授、医学部長、AMED理事長を歴任)のグループに配属された頃からです。当時はウミホタルのルシフェリンや、ルミノールを用いた化学発光(ケミルミネッセンス)でオキシダントを検出していました。ケミルミネッセンスの検出やのちに飛躍的に進歩した蛍光色素(ジクロロフルオレセインやローダミン)などを用い、外来・病棟業務の後から、夜遅くまで、肝臓や腸間膜、小腸、胃などの消化器臓器微小循環系のin vivo, ex vivo(灌流肝など)モデルでの酸化ストレスを高感度デジタル生体顕微鏡システムで撮像する実験をしていました。また、患者さんの血液検体を用い、潰瘍性大腸炎やクローン病での末梢白血球からのケミルミネッセンスを測定し、病勢との相関を検討する臨床研究もさせていただきました。1993年からは米国カリフォルニア大学サンディエゴ校の微小循環研究室に留学する機会をいただき、in vivoの動物実験で、内皮細胞や臓器実質細胞、さらには膠着白血球からのラジカル産生をリアルタイムに解析し、臓器微小循環系での酸化ストレスと病態について研究させていただきました。留学から帰国すると、当時、話題になっていた、胃粘膜病態機序へのピロリ菌(H. pylori)の関与について検討し、酸化ストレスを基盤にした激しい炎症病変であることを実証し、その後は、潰瘍生成機序、発がん機構へと研究を進展させ、胃がんの進展時のがん幹細胞の発生においては、酸化ストレスが重要な調節役を担うことを示しました。以上のように、酸化ストレス研究は、疾患を研究する臨床医にとって、必須の領域であり、大変意義深かったと思っております。若手の研究者の皆様には、いつも、目の前にいる患者さんの病態や治療は、その前の時代に解明されたものを診ているということ、つまり、少し前まで治らなかったものが、研究の進歩により治るようになったこと、そのため、今、治らないものは、研究することで治るようにすることができることを常に考え続けてほしいと思います。

引き続き、本会の理事としても、皆さまのお役に立てることを肝に銘じていきたいと思っております。引き続き、皆さまからのご指導ご支援をよろしくお願ひ申し上げます。



「2022年 学術賞 を受賞して」



岡崎 泰昌

(名古屋大学大学院医学系研究科生体反応病理学)



この度は、栄誉ある日本酸化ストレス学会2022年度学術賞を頂き、大変光栄に存じます。内藤裕二理事長、松浦達也選考委員長をはじめ選考に携わられた先生方や、お世話になった先生方に厚く御礼を申し上げます。

私は岡山大学を卒業後、本学会名誉会員の岡田茂名誉教授が主宰されていた病態探究医学(第一病理)教室の大学院課程に進学し、病理診断学の研修と並行して、鉄-トリプトファン代謝により腎臓から発がんに至る動物モデルを用い、発がんの化学予防の研究を行って参りました。岡田茂名誉教授にご紹介を頂き、アメリカ合衆国Louisiana State University Health Sciences Center in ShreveportにてJonathan GLASS教授のご指導で、molecular mechanisms of intestinal absorptionの解析を行って参りました。博士研究員として二年間の留学後に岡山大学に復職し、動物モデルを用いる急性炎症の研究に従事していましたが、本学会理事の豊國伸哉教授が主宰されています名古屋大学大学院医学系研究科 生体反応病理学に採用して頂き、動物モデルを中心として中皮腫の研究を行っています。

中皮腫の発症には疫学的にアスベスト線維の曝露と相関があることが知られており、国内で商業的に使用されてきたアスベスト線維から今後も患者さんが増加することが危惧されており、酸化ストレス研究から有用な知見を生み出したいと思っています。また、名古屋大学低温プラズマ科学研究所と医工連携の共同研究に参画させて頂いており、低温プラズマが産生する活性酸素を修飾する分子や生物学的作用の解析を通じ、医療応用の一端を担うことが出来ればと思っています。本受賞を励みに、今後も酸化ストレス研究に精励するだけではなく、本学会にも貢献させて頂きたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願ひ申し上げます。

「2022年 学術賞 を受賞して」



谷戸 正樹

(島根大学医学部眼科学講座・教授)



この度は、歴史ある日本酸化ストレス学会の学術賞を頂戴しまして、光栄に存じます。内藤裕二理事長、選考委員の先生方をはじめ、会員諸氏に厚くお礼申し上げます。私は1996年に島根医科大学(現島根大学)の眼科に入局臨床家としてのキャリアをスタートしました。その後、京都大学ウイリス研究所の淀井淳司教授の研究室に国内留学する機会を得て、1999年から5年半、大学院生及びポスドクとして過ごしました。その間、可視光線による網膜視細胞障害(傷害)におけるチオレドキシンのレドックス因子の関わりをテーマに研究に従事しました。続けて、2004年から2年間、オクラホマ大学ヘルスサイエンスセンターに留学し、Robert E Anderson教授の下で同様の研究を継続しました。研究テーマを通じて、視細胞外節の多価不飽和脂肪酸の酸化修飾物生成が網膜光障害の最初のステップとして必須である事、それらは同時に生体防御反応カスケードの分子スイッチとしての役割を持つことを確認しました。2006年に帰国した後、緑内障を中心とした眼疾患の診断・治療に従事するようになり、現在に至っております。緑内障は、本邦の失明原因第1位の疾患で、加齢が主たるリスクファクターです。これまで、加齢と緑内障の間をつなぐキーワードとしての酸化ストレスについて臨床的知見を集積して来しました。その間、元々眼局所の疾患と考えられていた緑内障が、生活習慣など全身因子と深く関わることが明らかとなってきました。現在、有効な病態マーカーの発見を通じて、多数の患者さんに応用可能な疾患予防法の開発を目標に研究を進めています。会員の先生方とのインターアクションは、目標達成のために極めて重要と感じております。微力ながら、本学会のさらなる発展に関わることが出来れば幸いです。今後とも、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

「2022年 八木記念学術奨励賞 を受賞して」

東村 泰希(石川県立大学生物資源環境学部)



この度は、八木記念学術奨励賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に感じております。日本酸化ストレス学会理事長である内藤裕二先生をはじめ、選考委員の先生方ならびに関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。また、本研究の遂行においてご尽力頂きました先生方、学生諸氏に深く感謝申し上げます。本論文では、健康野菜として注目されるヤーコンの新規機能性として大腸炎抑制効果を見出し、その機能性発現には腸バリア機能の増強や、腸内細菌叢の変化が重要であることを報告いたしました。本受賞を励みに今後も研究活動に邁進する所存です。

～ High Citation Award ～

本学会オフィシャルジャーナルであるJournal of Clinical Biochemistry and Nutrition (JCBN)において、前年度第一著者として受理された論文の中で、引用が多く、IF向上の為に貢献のあった論文に授与するものです。2022年度は、下記の2件に授与されました。

2022年度受賞者: 以下2件

(1) 総説: 53件 in 2021 Shuya Kasai et al.
(Role of the ISR-ATF4 pathway and its cross talk with Nrf2 in mitochondrial quality control: p1-12, Vol.64(1), 2019)

(2) 原著: 33件 in 2021 Chihiro Ushiroda et al.
(Green tea polyphenol (epigallocatechin-3-gallate) improves gut dysbiosis and serum bile acids dysregulation in high-fat diet-fed mice: p34-46, Vol.65(1), 2019)



「2022年 学術奨励賞を受賞して」

本岡 大社 (名古屋大学医学系研究科)

この度は栄誉ある日本酸化ストレス学会の学術奨励賞を頂き大変光栄に存じます。理事長の内藤裕二先生、会長の松井裕史先生、審査員の先生方、そしてご指導を賜りました豊国伸哉先生や共同研究者の先生方に厚く御礼申し上げます。私の研究ではタルクによる卵巣発がんを動物モデルで実証し、その機序に鉄の異常集積による酸化ストレスが関わることを示して参りました。酸化ストレスは学ぶほど奥深く、興味深いテーマです。本受賞を励みに今後も酸化ストレスの研究に邁進して参ります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



シャスニ バビータ Babita SHASHNI (筑波大学)

I am honored to receive the prestigious Young Investigator Award from the 75th Annual Meeting of the Society for Free Radical Research Japan 2022. I express my sincerest gratitude to all the selection committee for recognizing and acknowledging my contribution. I have the highest appreciation for my supervisor Prof. Yukio Nagasaki and our team for their continuous guidance and support. This esteemed award boosts my morale to continue my efforts to explore the therapeutic significance of oxidative stress pathways. My work focusses on the development of drug delivery systems for antioxidants for their therapeutic application in oxidative stress-related diseases. We continue our efforts to improve the therapeutic index of the conventional antioxidants with the hope to overcome their drawbacks and benefit their clinical acceptance. SFRR meeting is an opportunity to meet and share ideas with scientists from different disciplines. Past decade of attending SFRR conferences has provided me deep insights on the physiological relevance of oxidative stress, which was immensely helpful for my research targeting related diseases. I hope to continue my association with the society and exchange our findings and knowledge with scientists with a common goal of improving our well-being. Finally, I would like to congratulate the organizing committee of SFRR-Japan 2022 for an exciting and successful meeting. I look forward to attending SFRR-Japan 2023.



【功労賞】 おめでとございます！

長きにわたり、本会への功績が大なる、下記2名の名誉会員の先生方が受賞されました。前身である旧学会からの会員歴は、27-30年を数える 両先生のご尽力に深く感謝申し上げます。

井上 正康(健康科学研究所) 入会年:1992年(旧学会)
大澤 俊彦(愛知学院大学心身科学部健康栄養学科) 入会年:1994年(旧学会)



学会報告

「フリーラジカルスクール2021開催報告」

若手の会 代表 安井 博宣 (北海道大学)

日時:2022年3月14日(月)9:00~15:00

会場:やまなみ(新潟県南魚沼市)

〒949-7104新潟県南魚沼市寺尾1494
及び WEB会場(Zoom)



連日の厳しい寒さが和らいできた3月14日、毎年恒例のFree Radical Schoolを新潟県南魚沼市の民宿やまなみにおいて開催いたしました。本年は、ハイブリッド開催として現地13名、オンライン21名の参加者が集い、和気藹々とした雰囲気の中で、学びを楽しみました。講師には、日本酸化ストレス学会内外から10名の講師にお越しいただき、フリーラジカルや酸化ストレスに関連する基礎から臨床までの最新知見をお話しいただきました。学会外からの講師としては、地元の新潟大学から古川真先生にオンライン参加していただき、「アドバンスド電子スピン共鳴を活用した食物性食品の育成環境研究」と題してご講演をいただきました。古川先生からは、難しいESRの原理を分かりやすくお話しいただくとともに、地元の強みを生かした研究の楽しさや、学生さんとともに研究室を盛り立てていこうという熱い思いを伝えていただきました。さらに、第74回日本酸化ストレス学会学術集会上において学術奨励賞を受賞した安田大輔先生(大阪医科薬科大学)と本間拓二郎先生(山形大学)からもご講演いただきました。また、例年はポスターセッションとして行っている学生発表は、Zoomによる口頭発表として行いました。今回は座長を発表者の持ち回りとして、学会運営のトレーニングもおこないました。学生発表の最優秀演題賞には、北海道大学の加藤千博さんの「芋焼酎から抽出した脂溶性ポリフェノールは抗腫瘍作用を持ち抗がん治療を増強する」が選ばれました。新型コロナウイルス感染症対策としてオンライン会場では、参加者全員で抗原検査を行い、全員の状態を確認しました。また、要旨集に健康チェックシートを挿入し、参加前からの健康管理を徹底しました。その他、会場における三密対策および消毒もしっかりと行いました。地元南魚沼出身の松井裕史先生(筑波大学)と富田勉先生(株式会社タイムラプスビジョン)よりフリーラジカルケーキの差し入れをいただきました。開催地のまん延防止等重点措置の延長などにより一時はオンラインの開催が危ぶまれましたが、日本酸化ストレス学会の先生方やオンライン開催施設の関係者など多くの皆さまのご協力により、無事に開催することができました。スタッフ一同から改めて御礼申し上げます。次回は2023年2月に、札幌近郊で開催することが決まっております。引き続きの若手の会主催のフリーラジカルスクール (撮影の時のみマスクを外しています。)へのご支援をどうぞよろしくお願い致します。



年次学術集会開催報告

第75回日本酸化ストレス学会学術集会



会 期:2022(令和4)年5月25日(水)~26日(木)
会 場:つくば国際会議場 (WEB開催)
〒305-0032 茨城県つくば市竹園2-20-3
会 長:松井裕史 (筑波大学医学医療消化器内科)

『盲亀の浮木、優曇華の花-Serendipityを求めて』というテーマのもとに5/25-26に第75回日本酸化ストレス学会年次学術集会をつくば国際会議場発信でWeb開催いたしました。だれよりも(理事長には負けているか?)お祭り好きな人間として対面開催、懇親会を派手に開くと心に決めていましたが、オミクロン株が蔓延している中無謀なことをしてクラスター中心にでもなったら謝り切れないと考え、断腸の思いでWeb開催を選択したのでした。これだけが今となっては残念ですが、学会そのものの内容としてはすこぶる充実していました。シンポジウム「炎症と再生」、シンポジウム2「藻類由来機能性物質」、シンポジウム4「腸内細菌プロバイオティクス、プレバイオティクス」と最先端の話題を討論する企画の充実度もさることながら、シンポジウム3「極限的」は末松先生の発案で企画したもので、稀代の学者が異なる領域の成果を発表し、互いに批評するという異色の鼎談となったことは思い出深いです。また同郷の加藤澤男先生は五輪体操競技で金メダル8個、銀メダル1個、銅メダル3個と日本一のメダリストとして、体操競技を通じて身に着けた哲学を語ってください、大変意義深いものでした。さらに小職の藻の師匠渡邊信先生の講演は、長い間継続してきた藻類研究の集大成のお話で、SDGsが押しこめられる現状に叶った話題提供をしていただけました。またB会場の押せ押せの討論も今や語り草になっています。個人的な興味でプログラムを組みましたが、同じ平仄でまとまった会となり感謝しております。



The 10th Biennial Meeting of Society for Free Radical Research-Asia (SFRR-Asia)

日時:2022年11月4日~6日

会場:ソウル大学・ソウル、韓国

中西 郁夫(国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構 量子生命・医学部門 量子生命科学研究所)



2022年11月4日から6日にソウル大で開催された第10回アジアフリーラジカル学会(SFRR-Asia 2022)に出席してきました。当初は2021年に大邱で開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で場所も変わり、1年以上遅れての開催となりました。ただ、完全オンラインではなく、対面メインのハイブリッド開催にさせていただいたことには大変うれしく思います。やはり学会や音楽、演劇はライブに限りませぬ!!(個人の感想です)私自身は2年半ぶりの海外出張で、出入国に不安でしたが、ちょうど11月から韓国入国のビザが免除され、入国初日のPCR検査義務も廃止となり、いよいよ世界的にコロナ前に戻りつつある雰囲気を感じました(実際、2週間後にフロリダで出席したSfRRBMでは誰もマスクを着けていませんでした)。2003年にも第1回のこの学会でソウル大に来たはずですが、キャンパスがあまりにも広大なので、初日には極寒の中(紅葉がきれいでした!）、迷いこ迷い、会場に着くまでに遭難しそうになりました(モリス水迷路の Maus のごとく、日に日にすんなり着けるようになりましたが...)。会場では豊國先生や赤池先生をはじめ日本酸化ストレス学会関係の先生方やBarry Halliwell先生、Helmut Sies先生と久々にお会いでき、皆さんお元気そうで安心しました。2日半にわたり4件のPlenary Lectureと、2会場での12件のシンポジウム、4件のMeet-the-Expert(ランチョンセミナー形式でお弁当がとてもおおいかったです!)、18件の一般口頭発表、59件のポスター発表と大々充実したプログラムで、ここ数年のフラストレーションを晴らすかのように白熱したディスカッションが繰り広げられました。中国の方々が政府の方針で海外出張できなかったことは大変残念でしたが、Welcome ReceptionやGala Dinnerも無事開催され(何度も乾杯があり、大いに盛り上がりました)、久々に対面形式の国際学会を満喫することができました。素晴らしいホスピタリティで参加者を迎えていただいた大会長のYoung-Joon Surh先生とスタッフの皆さまに心より感謝いたします。また、会期中、会場内外で行動を共にさせていただき(海鮮料理や焼き肉、レバ刺し、ユッケは絶品でした!!)大変お世話になった芝浦工大の福井先生と筑波大の長崎先生、両先生の研究室メンバーの方々、量研の松本謙一郎先生と伊藤紘先生に感謝申し上げます。2年後の開催は未定とのことです。今から再会が楽しみです。

◇◇◇ 関連学会 開催案内 ◇◇◇

以下の関連学会情報は予定を多く含みます。変更などが生じる可能性もありますので、詳細については、各主催団体にお問い合わせ下さい。また、学会HPにでも随時情報を掲載予定です。

【東海支部】

東海支部では2022年2月19日(土)に三重大学医学部 及川伸二先生を実行委員長として第10回支部学術集会(記念集会)をオンライン開催しました。教育講演では東海支部設立当初に関わられた鈴鹿医療科学大学 川西正祐先生のご講演があり、名古屋市立大学 中川彦彦先生から東海支部10年の歩みを紹介する記念講演も行われました。一般講演では東海地区酸化ストレス研究の活況を反映して例年通りの活発な議論が行われました。2022年度の支部学術集会は次の予定で開催されます。

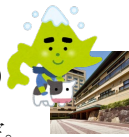
第11回(2022年度)日本酸化ストレス学会東海支部学術集会

会 期:2023年2月18日(土)13:00~18:00
会 場:自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター(OCC)
<http://www.orion.ac.jp/occ/>
およびWeb(Zoom)によるハイブリッド開催

教育講演:内田邦敏先生(静岡県立大学)、田中宏昌先生(名古屋大学)
演題締切:2023年1月10日(火)
要旨締切:2023年1月24日(火)
事前参加締切:2022年2月1日(水)

フリーラジカルスクールin定山溪

日時:2023年2月23日14時-24日14時(予定)
会場:倶楽部 錦溪(定山溪研修保養施設)(札幌市南区)
<https://www.club-kinkei.com/>
*講演者には現地参加して頂く形のハイブリッド形式予定。



SfRBM 2023 & SFRR 21st Biennial Meeting

Date: November 16-19, 2023
Venue: Punta del Este Convention & Exhibition Center, Punta del Este, Uruguay
Contact: <https://sfrbm.org/>



新 シリーズ:酸化ストレスの轟き 第8回



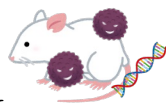
「鉄の不思議が私を酸化ストレス研究に追い込んだ」

岡田 茂

(認定NPO法人日本・マンマー医療人育成支援協会)



40年前、鉄ニトリロ三酢酸(鉄nta)のラット腹腔内投与による高率な腎臓がんの発生を動物実験の最中に発見。京都大で研究を始めて3年目、衝撃的なできごとだった。鉄による発がんは文献的にも皆無。ただ、白人に多い鉄過剰症である遺伝性ヘモクロマトーシスでは肝硬変、肝がんの発生が高まることは知られていた。研究が進み、鉄の酸化還元反応により活性酸素種生成を促進し、それによる脂質過酸化、細胞傷害が引き起こされるという道筋が見えた。若手研究者も集まって研究も進んだ。発がんについては名古屋大学の豊國伸哉教授のフリーラジカルによるノンランダムな遺伝子傷害についての研究が一つの山となった。82歳の今なお頭を掠めるのは、キレート物質ntaと結合した鉄がどのようにして、このような活性を持つようになるのか、という疑問だ。キレート化学の権威である西田雄三教授(当時山形大学理学部)からのお話も伺い、現在、私は鉄による細胞障害性は、一般に信じられているフェントン反応で生じるヒドロキシルラジカルではなく、鉄キレートに結合した酸素の性質によるのではないかと考えている。細胞のフェロトーシスにより拡散した鉄を含む過酸化物が近傍の細胞活性に影響を及ぼすことも考慮にいれたい。アミノ酸、核酸など多くの体内分子種はキレート物質として働く。女性に比べ鉄蓄積量の多い男性は発がん率が高く、寿命も短いことも説明できそうだ。酸化ストレスも鉄の存在を無視しては説明できない。若手研究者の増えることを期待している。



◇ SFRR International & Asia News ◇

* 関連国際学会が数年ぶりに開催され、各々若手奨励賞(YIA)が授与されました。

SFRR Asia Biennial Meeting

The 10th Biennial Meeting of Society for Free Radical Research-Asia (SFRR-Asia)
Date: 2022年11月4日~6日
Venue: 韓国 ソウル大学 会長: Prof. Young-Joon Surh (ソウル大学)



SFRR ASIA TRAVEL AWARD Supported by T&F

1) Biplab Kumar Dash 2) 張 田力(Tianli Zhang)



SFRR Japan YIA 受賞者(5名)

1) 伊藤 紘、2) 加藤 優吾、3) 芳賀 一樹、4) 豊元 悠弥、5) 鳥海 拓都
Outstanding Presentation Award (Best AWARD Oral) (10th事務局より)

1) 鳥海 拓都、2) 三島 万由子
Outstanding Presentation Award (Best AWARD Poster) (10th事務局より)

1) Sunghyeon Yoon

SFRR Australasia and Japan Joint Biennial Meeting

The 10th Biennial Meeting of Society for Free Radical Research-Australasia and Japan (SFRR A+J)
Date: 2022年12月5日~7日

SFRR Japan YIA 受賞者(5名)

1) 伊藤 紘、2) 原田 陸、3) 中村 朱里、4) 鳥海 拓都、5) 藤間 ゆみ

益々のご活躍を記念しております。



* SFRR Asia: 新しいTreasureに中川彦彦先生が就任されました。

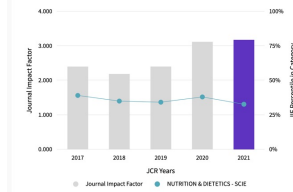
Presidentは内藤裕二先生がコロナ禍を挟んでの任期満了となり、次会長は韓国のYoung-Joon Surh先生が就任されました。

JCBN (学会オフィシャルジャーナル) 情報
(Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition)

JCBN随時オンライン投稿を受付中

Online SubmissionのURL

<http://www.editorialmanager.com/jcbn/>



IF: 3.179
(2021)

(as of Dec. 2022)

頁チャージは会員特別割引価格を設定しています。

※特別審査・掲載なども受付しております。(別途有料・編集事務局宛にご相談下さい。)

Editorial Secretariat for JCBN jcbn@nacoss.com

◇◇◇ 事務局より ◇◇◇

With コロナの生活も3年目となりました。ヨーロッパ、アメリカでは日本に先駆けてノーマスクの日常を取り戻しつつあるようですが、寒い冬を迎えて、感染再拡大の様子に、今一度気を引き締め直しております。そんな中、先に行われましたサッカーW杯は世界を熱狂させ、久しぶりに全世界的に活気を感じるイベントであったのではないのでしょうか。日本もサムライブルーの大躍進に心躍り、三苦の1mmのように最後まで諦めない道は開けるという歓喜に元気を貰った方も少なくなかったのではないのでしょうか。国際学会活動も活発になってきました。韓国やニュージーランドで行われたSFRR関連学会では日本からの参加者も少なくなかったようで嬉しく伺いました。事務局所属先では、未だ規制が厳しく現地参加は叶わず残念でしたが、今年こそは！
と楽しみにしつつ新年のNLをお届け致します。



SFRR Newsletter 2023年1月号

発行: 2023年1月20日

一般社団法人日本酸化ストレス学会事務局

(総務委員会: 半田 修・犬童寛子・中西郁夫)

法人事務局: 〒602-8048

京都市上京区下立売通小川東入西大路町146番地 中西印刷(株)内

Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662

内容に関するお問い合わせ: E-mail: sfrj@koto.kpu-m.ac.jp

HP: <http://sfrj.umin.jp/>

